

後世への最大遺物

ある経済人の方から、明治期のキリスト教思想家内村鑑三の「後世への最大遺物」と題する講演録をいただきました。私が文明論、文化論、歴史物が好きなことをご存じだったのでしょうか。

内村の講演は、江戸時代の思想家の頼山陽の詩の一節「千載青史に列するを得ん(昔の偉人たちと肩を並べ歴史に名を遺すような人間になりたい)」の紹介から始まります。そして、この世に生きた証として私たちが後世に遺すべきことは何かということについて、聴衆に訴えました。

その第一は「お金」です。お金をためて、教育や福祉事業などを通じて社会のために遺すことが望ましいと言います。

第二は「事業」により、社会に役に立つこと

です。湖から水を引く土木工事を行い、後世まで近隣の村の干害を防いだ兄弟について語ります。

第三に「思想」を挙げ、複数の思想家を紹介しています。頼山陽の思想が明治維新を導くバックボーンとなったことやイギリスのジョン・ロックの「一個人は国家よりも大切なものである」という思想がフランスのルソーやモンテスキューに影響を与え、フランス革命やアメリカの独立につながったことについて話しています。

その上で内村は「勇ましい高尚なる生涯」こそ、お金や事業や思想に勝る「最大遺物」だと強調します。二宮金次郎が自分の身を人のために捧げ、農業改良事業に貢献したことを紹介しています。

内村は最後に、「我々に、後世に遺すものや、

後世の人にこれぞと
いって覚えられべき
ものがなくても、
あの人はこの世の
中に生きている間
は真面目な生涯を
送った人だといわれ
るだけのことを遺し
たい」と語り、講演を終えています。

全体を私なりに理解すれば、さまざまな困難が多い中、たとえ少数でも、力がなくても自らの志を遂げるべく力の限り行動したという「物語」こそが、後世の人たちへの最大のプレゼントであるということだと思います。



埼玉県知事 上田清司